

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 15 集

一造海城跡測量調査報告一

平成 6 年度

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 15 集

— 造海城跡測量調査報告 —

平成 6 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県内には、中世から近世にかけて造られたおよそ一千か所の城館跡が知られています。これらはいうまでもなく、当時の武将らが自らの本拠地や攻防の要所に築いたものであり、東国における中近世の歴史を知るうえで欠くことのできない重要な資料であります。

一方、本県は首都圏に位置することから、大規模な土地区画整理や宅地造成、道路等交通網の整備、ゴルフ場建設などの大規模な開発事業が数多く実施され、貝塚、古墳や城館跡などの埋蔵文化財の保護との調整が必要となっています。とくに城館跡は大規模なだけに、開発事業の影響を受けやすいといえるでしょう。

このため、千葉県教育委員会では、県内に所在する主要な城館跡で、かつ開発事業の影響を受けるおそれがあるものについて、昭和55年度より国の補助金を得て重要遺跡確認調査の一環として測量調査を実施し、その範囲や構造などを調べて今後の保護、活用に必要な資料としてまいりました。

今年度は、富津市竹岡地区の城山に所在する造海城跡の測量調査を、財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。その結果、城跡の範囲、本丸などの郭、堀、土塁などの施設の配置など、当時の城の構造などを知るきわめて重要な資料が得られました。

このたび、調査の成果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護、活用のため、ひろく県民の皆様に利用されることを切望します。

最後に、調査に当たって終始ご協力いただいた地元土地所有者や近隣の皆様、文化庁、富津市教育委員会ほか関係機関の皆様に、深く感謝申し上げたいと思います。

平成7年3月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 森 成吉

例　　言

1. 本書は次の城跡の測量調査報告書である。
造海城跡（遺跡コード226-006）富津市竹岡字城山9,735他
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている中近世城館跡測量調査の第3期第5年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 調査、整理作業及び報告書作成作業は、調査研究部長西山太郎、市原調査事務所長石田廣美の指導のもとに、市原調査事務所調査係長柴田龍司が行った。
4. 現地調査及び本書の作成に当たり、次の方々の御協力、御教示を得ました。記して謝意を表します。
(順不同・敬称略)
富津市教育委員会、東海建設株式会社、船橋市西図書館、平野隆志、桐村修司、
石崎益男、滝川恒昭、角田　誠
5. 地形測量は、京葉測量㈱に委託し、平成6年11月、12月の2か月にわたって行った。
6. 本書に使用した方位はすべて公共座標による。
7. 本書に使用した地図の出典は図中に明記した。
8. 上総竹ヶ岳砲臺図及び上総天羽郡竹ヶ岳荒増之図は船橋市西図書館に所蔵されており、同館の許可を得て掲載した。

本文目次

第1章 造海域跡の地理的環境.....	1
第2章 造海域跡の歴史的環境	
1. 中世.....	1
2. 近世.....	6
3. 歴史地理的景観.....	6
第3章 調査の経緯と概要.....	10
第4章 城郭の構造	
1. 概要.....	11
2. 主郭部.....	11
3. 支尾根・斜面部.....	12
4. 据部.....	14
第5章 まとめ	
1. 測量調査からみた造海域跡.....	15
2. 史料・記録などからみた造海域跡.....	15
3. 海域の定義.....	17
4. 房総の海域.....	18
5. 結語.....	22

挿図目次

第1図 造海域跡位置図	2
第2図 造海域跡周辺の主要城跡位置図	4
第3図 造海域跡周辺の地形及び小字地名図	8
第4図 近代初頭の主要道図	16
第5図 房総の海域分布図	19
第6図 岡本城跡測量図	20
第7図 新井城跡概念図	23
第8図 下田城跡概念図	24

付図1 造海域跡地形測量図 (1:2,000)

付図2 造海域跡概念図 (1:2,000)

図版目次

図版1	1. 上総竹ヶ岳砲臺絵図	2. 上総国天羽郡竹ヶ岳荒増之絵図
図版2	造海域跡周辺空中写真 (1967年撮影)	
図版3	造海域跡空中写真 (1946年撮影)	
図版4	1. 造海域跡遠景俯瞰	2. 造海域跡近景俯瞰
図版5	1. 城跡裾部と対岸の三浦半島	2. 白狐川沿いの平野部
図版6	1. 城跡北東端の白狐川河口部	2. 城跡北側の裾部
図版7	1. 砲台跡⑫遠景	2. 砲台跡⑫近景
図版8	1. 石壠遺構⑩	2. 土壠と通路⑪
図版9	1. 井戸跡⑬	2. 石垣遺構⑭
図版10	1. 切岸平場遺構⑮	2. 切通し遺構⑯
図版11	1. 横堀⑮	2. 横堀⑯
図版12	1. 貯水施設跡⑯	2. 石垣遺構⑭
図版13	1. 切通し遺構⑯	2. 石壠遺構⑭
図版14	1. 切石置場跡⑯	2. 切石置場跡⑯
図版15	1. 石垣と土管⑰	2. 石垣と土管⑰

第1章 造海城跡の地理的環境

千葉県は北から下総、上総、安房の旧三か国から成るが、造海城跡の所在する富津市は東京湾に面する西上総南部に位置する。¹²³ 城跡は富津市竹岡字城山及び萩生字花ノ木・木出根・燈籠坂に所在する。

造海城跡は、上総南部から安房北部にかけて展開する標高200mから400mほどの房総丘陵の北西端に位置し、東西から入り込む支谷によって馬背状になった細長い尾根（この下を現在国道やJR内房線のトンネルが通る）から北側の丘陵全体を城域としている。丘陵の北西面は直接東京湾（浦賀水道）に接している。城域内の最高所は101.2mを測る。

城跡の周辺地形は、南側が標高160mほどの丘陵に続くほかは、北側は海、西侧と東側は支谷によって城域は自然地形の上でも隔離されている。西側の支谷は字「津浜」の地名が残された海岸から入り込み、先述した馬背状尾根まで廻り込んでくる。東側は城跡の北東端下で東京湾に注ぐ白狐川によって形成された小規模な平野が広がっている。白狐川は河口から南東約5.5kmの上総西部と安房西部を画す鶴山山系北側に源を発する小河川である。

三浦半島（神奈川県横須賀市、三浦市ほか）と造海城跡とは東京湾を挟んで至近距離にあり、久里浜や浦賀（ともに横須賀市）までわずか12kmほどである。また、伊豆半島の伊東市まで約70km、伊豆大島まで約60kmの海上となる。

第2章 造海城跡の歴史的環境

1. 中世

城跡の所在する富津市竹岡地区は、史料で確認できるだけで中世以来2度地名が変更になっている。また、城そのものも戦国時代と江戸時代後期に使用されているため、当城跡の歴史的環境を語る上で複雑な様相を示す。

地名に関しては、初現史料の南北朝時代から室町時代にかけてはつくらうみ（津久良海、作海、造網）と呼ばれていた。

史料A

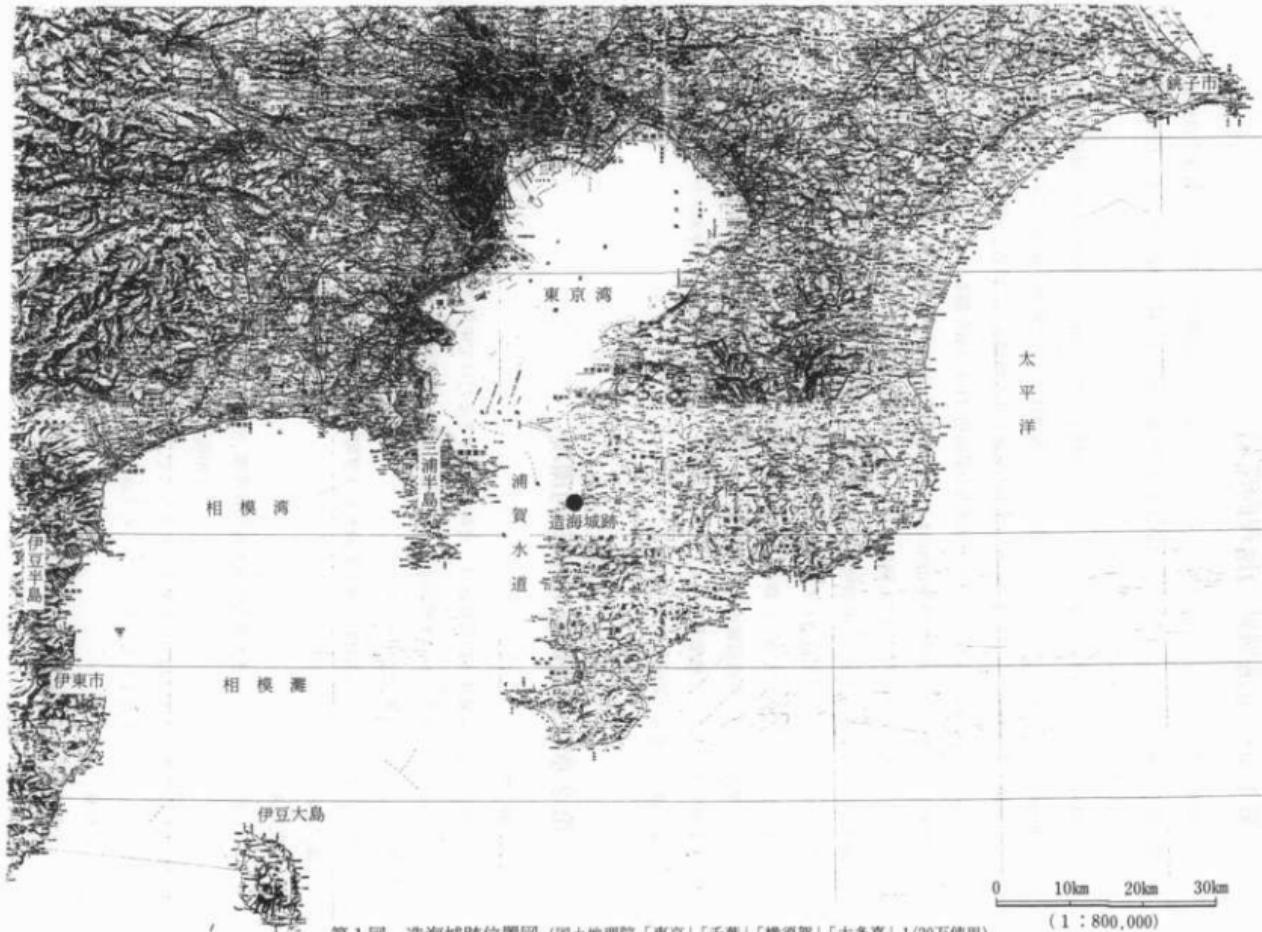
（前略）次上総国三直・津久良海・真利谷等郷（後略）

「相馬岡田文書」¹²⁴

史料Aは建武4年（1339）と考えられるもので、相馬氏が合戦の恩賞として津久良海郷等を与えてほしい旨を言上したもので、つくらうみ地名の初現史料である。

史料B

大御所御料所上総国天羽郡内萩生・作海郷_{吉治者守}事、（中略）



第1図 造海城跡位置図(国土地理院「東京」「千葉」「横須賀」「大多喜」1/20万使用)

(1 : 800,000)

(1417)
応永廿四年十月十七日前安房守

佐々木隱岐守殿

「上杉文書」⁽³⁾

史料Bは字は異なるものの、つくらうみの呼称は変わらない。また、この史料で重要なことは「大御所御料所」と言われるよう当地が鎌倉府直轄地であったことである。この段階までは城郭に関する史料はないが、当地が漁として鎌倉府に重要視されていたことが明らかである。

その後しばらく史料上には見られなくなるが、16世紀に入ると城郭として史料上確認できるようになる。ただし、この段階では百首城と呼ばれ造海城と呼ばれていないが、後述するほど同時期の史料から百首城と造海城が同一の城郭であることが確認できる。⁽⁴⁾

史料C

(天文二年七月二十七日)

房州板木大膳大夫為里見義豊之被討。同伯叔里見左衛門大夫実堯入道被誅也。所残一族已下百首之要害ニ立籠ル・請當國之扶佐ヲ。小田原江勤使下着之由風聞。

「快元僧都記」⁽⁵⁾

史料Cは天文2年(1533)に里見家当主の義豊によって叔父実堯が殺されたことを契機に勃発した内乱に、実堯の遺子義堯等が百首要害に立て籠り、後北条氏に援助を要請したことを示すものである。

史料D

(天文六年五月十七日)

上總嶺上。房州百首城兵。新地之者共。御免之由被仰出有御悦。

「快元僧都記」⁽⁶⁾

史料Dは天文6年(1537)に勃発した真里谷武田氏の内乱に係わる史料である。この内乱は真里谷武田氏宗家の信応と一族の信隆との間で引き起こされたもので、信応側には小弓公方足利義明、信隆側には後北条氏と、それぞれ外部の勢力を後ろ盾としていた。百首城は嶺上城⁽⁷⁾、新地之城⁽⁸⁾とともに信隆側の拠点城郭の一つであったことをこの史料は示している。

史料C・D及び当時の西上総における政治状況を加味すれば、造海城(=百首城)は真里谷城を本拠とする真里谷武田氏にとって、近接する嶺上城とともに西上総南半の拠点として位置付けられていたと推測される。そして、内陸の嶺上城は陸上交通の要衝として、海岸部の造海城は東京湾の海上交通の拠点として、各々性格の異なる城郭であった。

造海城がいつごろから真里谷武田氏の支城となったかは史料上では明らかにすることはできないが、おそらく真里谷武田氏が上総に入部した15世紀後半には築城されて支城に取り立てられたものと考えられる。

真里谷武田氏は天文の内乱と天文7年の第一次国府台合戦の敗北を契機に急速に衰退してい



第2図 造海域跡周辺の主要城跡位置図

(国土地理院「富津」「那古」1/50,000使用)

ったため、上総には安房の里見氏が替わって進出してきた。このため、造海城も16世紀中葉には里見氏が領有することとなった。

史料E

(前略) 百しゅは正木源七郎殿もたれ候、(後略)

天正八年十一月日 我 (花押)

〔柏山文書〕⁽⁸⁾

史料F

自房州武藏下總津邊江透候廻船為検候間、百首之湊江上下仁可寄由申付候 (後略)

己丑 (天正十七年・1589)

十月十三日 (里見義康龍朱印影)

正木淡路守殿

〔武州文書〕⁽⁹⁾

史料E・Fによって戦国時代末期には里見氏の重臣であった正木氏（源七郎、淡路守）が城主であったことがわかる。また、重要なことは造海城（=百首城）と一体となった湊があり、しかもその湊が東京湾を航行する廻船に対して海關の機能を有していたことである。

史料G

(前略)

房州

一かなや 真崎淡路守抱

上総

一つくろふみ 真崎淡路守家城

(後略)

〔毛利家文書〕⁽¹⁰⁾

史料Gは天正18年（1590）の豊臣秀吉による後北条氏攻めに先立って、関東の主要な城郭を書き上げたもので、里見義康領内の城の一つに造海城がある（無論百首城の記載はない）。史料Fとは1年の差しかなく、両史料とも正木（真崎）淡路守が城主として登場することから、造海城と百首城は同一の城とみて間違いないものである。

また、史料Gともう一点同類の史料⁽¹¹⁾から里見氏の領内には計12か所の城郭が記載されているが、その半分に当たる造海城、金谷城（富津市）、勝山城（安房郡鋸南町）、岡本城（安房郡富浦町）、吉尾城（勝浦市）、勝浦城（勝浦市）の6か城が、従来海賊城と呼ばれる海城であることは里見氏が海に大きく関わっていたことを示すとともに、東京湾岸の里見氏領域北端の海城である造海城の位置は戦略上重要なものであったことを示している。

天正18年後北条氏は豊臣氏によって滅ぼされ、その戦後処理によって里見氏は上総を没収さ

れ替わりに徳川氏の領国とされた。造海城も徳川領となつたが、徳川氏の家臣が入城した史料のみならず伝承さえもないことから、短期間の使用はあったかもしれないものの、まもなく廃城になったものと考えられる。基本的には天正18年で造海城は中世城郭としての使命を終えたのである。

2. 近世

造海城跡が再び歴史的に注目されたのは幕末になってからである。18世紀末になると日本近海に外国船が姿を見せ始め、寛政4年（1792）にはロシアのラクスマンが根室に入港する事件が起こった。時の老中松平定信はそれに前後して、異国漂流船の取扱いを指示したり、海岸部に領地を持つ大名に対して船や大砲の数を上申するよう命じた。また、自ら相模・伊豆を巡見し、江戸湾防備の対応策を提出し、ここに初めて幕府による江戸湾の海防⁽¹²⁾に対する具体的な対策が立てられたのである。

この対策は松平定信の辞職によって結局は具体化されなかつたが、享和4年（1804）に幕府は江戸湾防備の実行を決定し、文化7年（1810）陸奥白河藩に上総・安房の海岸防備を命じた。

白河藩は上総・安房の各所に砲台と陣屋を築くこととなつたが、その砲台の一つが造海城の跡地に築かれたのである。また城跡から東に800mほどの所に陣屋を置いた。そして、当初白河藩内ののみの呼称として、百首陣屋を竹ヶ岡陣屋、波左間陣屋（現館山市波左間）を松ヶ岡陣屋、白子陣屋（現安房郡千倉町白子）を梅ヶ丘陣屋と呼んだ。文化9年幕府によって百首村は竹ヶ岡村と正式に改名された。これで、当地はつくろうみ→百首→竹ヶ岡（現在は竹岡）と土地の呼称が2度変わつたことになる。

文政6年（1824）に白河藩は伊勢桑名に転封となり、替わりに幕府が直接海防を担当したが、天保13年（1842）には武藏忍藩、さらに弘化4年（1847）には会津藩が忍藩とともに房総の海防を命ぜられた。安政元年（1854）には岡山、筑後柳川藩と交代したが、同年の日米和親条約締結、安政5年（1858）の日米修好通商条約締結で、鎖国政策は崩解した。このため、富津岬にある台場を除き、造海城跡に設けられた砲台を始め房総各地の砲台、陣屋、遠見番所は廃止されることとなつた。

それ以後も、明治、大正、昭和と帝都東京を防衛するための東京湾の海防は重要な課題であり、事実難工事をもって海中に堡台が築かれていったが、造海城跡は再び海防施設に使われるることはなかつた。

3. 歴史地理的景観

ここでは近世の紀行文⁽¹³⁾と現存する歴史的地名等から造海城跡周辺の歴史地理的景観についてみておきたい。

延宝2年（1674）徳川光圀が水戸から成田、千葉、安房勝山、鎌倉を経て江戸へ帰った時に「甲寅紀行」という紀行文を書いている。それによれば、当地での行程は次のとおりである。湊村（富津市湊）に泊った翌朝天神山川（現在の湊川）を渡って十宮まで歩き、そこから小舟で海路勝山（安房郡鋸南町）まで行く。勝山からは海岸沿いに陸路を北上し、再び湊村に宿泊している。そして、湊村から六浦まで舟で行き鎌倉を訪ねている。造海城跡は湊村から勝山までの往復時に海側と陸側から2度見ている。

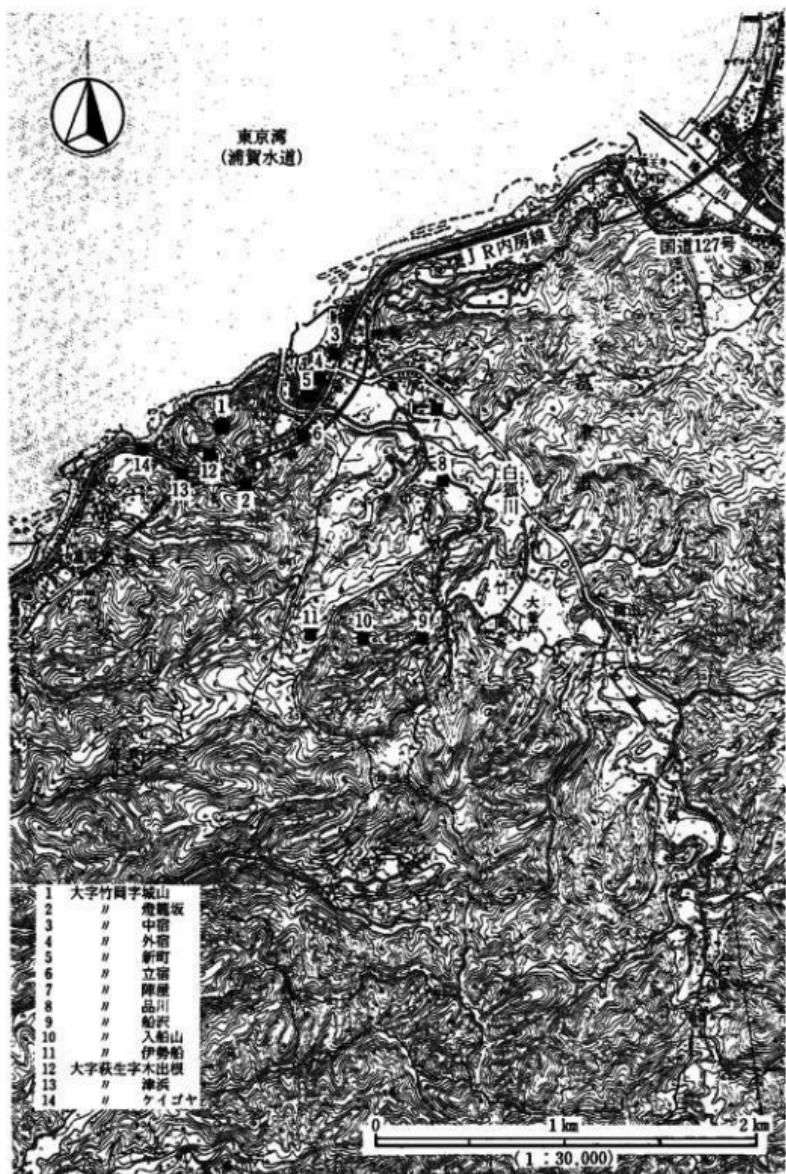
造海城跡に関する記述には、註3で紹介したように作絶海城を百首城に呼称を改めた由来、百首村の出崎（城跡の先端）に船の位置を確認するための「御旗山」があること、城の内外を画する馬背状の尾根に蠍蟬坂（現在は燈籠坂）と呼ばれる坂道があり、その坂が古城の大手と伝えられていること、などが記されている。

また城跡周辺については、天神山川（現在の湊川）河口に開けた湊村（富津市湊）は廻船や漁船の湊として賑わいをみせ、また光圀がここに3泊したことを記している。村が湊と宿場として西上総南半では17世紀中葉段階に既に最も繁栄していたことを推測させる。次に城跡のある百首村から安房勝山までの海岸沿いの陸路については帰路利用しているが、特に城跡から南に6kmほど行った明鐘岬¹⁴周辺の「八町許り」が難所で、その内「一町半余」が荷馬が通ることができないと記している。また、城跡寄りの道にも「洞坂」や「呼懸坂」といわれる、人がすれちがうことができないほどの坂道があることも触れている。このことから、百首村から明鐘岬までの海岸沿いの街道は17世紀中葉段階ではせいぜい人がひとり歩ける程度のものであったことがわかる。この時期においては東京湾沿いの上総と安房を結ぶ陸路としては主要な道でなかったこと、また、その状況は中世にさかのぼることが推測される。

また幕末になるが、文政10年（1827）に十返舎一九が『小湊參詣金草鞋』という絵草紙を著しているが、これに「百首は、（中略）比ところに山中、犬懸のかたへいく道あり。小松原へゆく道なり。百首より相模の浦賀へわたる船いづる。（後略）」と記している。犬懸は安房郡富山町犬掛で、安房を東西に横断する街道と上総と安房を縦断する街道が交差するところである。里見氏の内乱時の古戦場であり、また里見氏の有力支城の一つ滝田城があることからも、戦国期においても陸上交通の要衝であった地である。小松原は安房の太平洋の現鴨川市小松原であろう。百首村は幕末段階においても海岸沿いと白糸川沿いの陸路の分岐点であったことがわかる。

やはり幕末の安政4年（1857）に伊勢桑名藩¹⁵の小野正端が幕参と海防資料を入手するために房總各地を巡見し『遊房總記』を書き残している。それによれば、燈籠坂の坂上を右折して馬背状の道を行くと砲台に至るが、木戸があつて中に入れなかつたと記している。砲台段階においても燈籠坂から入るのが大手道となっていたことがわかる。

次に城跡の周辺も含めた主な歴史的・地名についてみておきたい。城跡は「竹岡」と「萩生」



第3図 造海域跡周辺の地形及び小字地名図

(国土地理院「上総漁」1/25,000使用)

の二つの大字にまたがって所在するが、まず大字竹岡での小字地名をみると、「城山」「中宿」「外宿」「新町」「立宿」「陣屋」「品川」「伊勢船」「入船山」「船沢」などの地名が注目される。「城山」は城跡の大部分を占める地名である。「中宿」「外宿」「新町」「立宿」は造海城の城下集落を推測させることも考えられる。しかし、城からみて最も外側（北側）から「中宿」→「外宿」→「新町」→「立宿」と城側へと配されることから、近世に入って海岸沿いの街道が整備されてから形成された宿場に伴う地名である可能性が高い。「陣屋」は現在竹岡小学校が建つており遺構は認められないが、幕末に海防関連で築かれた竹ヶ岡陣屋の跡地である。「品川」は白狐川左岸に近い場所に、「伊勢船」、「入船山」、「船沢」は白狐川に開析する小支谷の奥部にまとまっているが、江戸の品川や西国との海運を推測させる地名である。ただ、残念ながらこれらの地名の由来については確認することができなかった。

大字萩生の中では「木出根」、「ケイゴヤ」地名が注目される。「木出根」は城跡南西の裾部に認められる。ほかに県内で「木出」地名が認められるのは、金谷城跡⁽¹⁶⁾（富津市）、岡本城跡⁽¹⁷⁾（安房郡富浦町）、木出城跡（四衛道市）の3か所の城跡だけである。そのうち2か所は里見氏の城郭であり、城の裾部に認められる。造海城跡も含めて4か所のうち3か所が里見氏関係の城郭であることと、城郭における「木出」地名の位置（城跡の裾部）、「木出」という言い方から推測される性格などから、里見氏系城郭の居館かそれに準ずるような居住地区と城の主郭を結ぶ出入口を示す表現である可能性がある。「ケイゴヤ」は、「津浜」と呼ばれる浜と国道を挟んで城跡とは反対側にある。漢字を当てれば「警固屋」であろう。城郭とは画されていることと、幕末の砲台に近接していることから、砲台に関連した地名とみてよいであろう。

第3章 調査の経緯と概要

千葉県教育委員会では昭和55年から県内の中近世城館跡の中で、歴史的及び構造上重要と考えられる城館跡について、国庫補助を得て学術調査を実施してきた。1年目から10年目までは毎年2か所ずつ遺構確認発掘調査と測量調査を併用してきたが、11年目から今回の15年目までは測量調査のみ実施することとなった。また、この間は、城域の規模によって1か所だけの年度もあり、今回の造海域跡も含めて計28か所の城館跡の測量調査(発掘を伴う城館跡は20か所)を実施したこととなる。

測量調査は、測量業者に委託し、基準点測量や対空標式の設置後空中写真測量を行い、1,000分の1の地形素図を作成した。また、城域全体が樹木に被われ空中写真測量だけでは城跡の個々の遺構を把握することは不可能なため、調査担当者による現地踏査と概念図の作成作業を平行して行った。これら一連の作業を終了後、測量業者によって平板による城郭遺構の補捉測量を行い測量図を作成した。

測量調査の結果、城域については從来から言われていた燈籠坂と呼ばれる馬背状尾根から北側の丘陵全域であったが、今まで部分的にしか確認されていなかった城郭遺構を城域全体に確認することができた。さらに、戦国時代の遺構と近世後期の遺構の判別もおおむね可能となり、歴史資料としての城跡の価値を一段と高めることができた。

また、測量調査と平行して城跡内外の写真撮影と、城跡周辺の地名調査や微地形の観察等の歴史地理学的な調査を実施した。

第4章 城郭の構造（付図2）

1. 概要

造海城跡は戦国時代と近世後半に使われたため、両時代の遺構が残されている。近世後半は東京（江戸）湾海防のために砲台と遠見番所と呼ばれた見張所が置かれたが、それは戦国時代の古城跡としての要害性に着目したからこそである。このため戦国期の城域内全体にわたって手を加えている。中には戦国期の遺構を壊して造っているところもあり、明瞭に戦国と近世に区別できる遺構もある。また、逆に区別することが難しい遺構も多くある。今回は測量調査だけの表面観察のためかなり主観的な判断をくだしたところもあることをお断りしておく。

両時代の遺構が認められる城域として捉えられる規模は、長軸（北東—南西方向）700m、短軸（北北西—東南東）500mであり、面積は約277,000m²となる。城郭遺構は主尾根頂部の主郭群、主尾根から派生する支尾根上や斜面部に造り出された平場群、それと堀、土塁、虎口などの個々の遺構から構成される。以下、頂部から裾部へと上から下へ順に遺構の説明をすることとした。

2. 主郭部

主尾根頂部には郭（曲輪）としてよい平場が7か所（I～VII）認められる。I郭は主郭部では北東端に位置し、標高96.6mを測る。郭内は削平はしっかりと行われ郭として機能していたことは確かであるが、裾部とII郭へ向かう通路が若干曲げてある程度で虎口を強化する遺構は特に認められない。郭の東側下には先端部に向かって小規模な腰曲輪群と、堀あるいは虎口と考えられる堀状の落ち込み①があるぐらいで、防御的には極めて貧弱である。①は落石で埋まっているため本来の形状は捉えにくい。

II郭は標高101.2mを測り、城内では最も高く、削平もしっかりとしている北辺には削り残しの石塁②と井戸跡が認められる。井戸跡の周囲には井戸枠に使用されたと思われる石材片が散乱している。I郭側に主尾根上では唯一堀切③を入れている。堀切は上幅10m、I郭側からの深さ10mを測る。堀切の南端は腰曲輪に、北端は鍵の手状に曲がってI郭からII郭への通路によつかり、その先は堅堀④となって落ちる。このラインが白狐川河口部から進入する敵に対する実質的な最初の防御線である。堀底からII郭へは斜めに入る坂道で割とストレートに入ることができる。III郭側へは自然地形を多分に残した緩傾斜の道となる。

III郭は標高94.6mを測り、削平はしっかりといる。7か所の郭では最も広い郭である。しかし、郭内には個々の遺構は認められず、広い平坦な平場を造り出しているといった感がある。ただ、東側に派生する支尾根上には三柱神社からの道があり、II郭の北側下によつかるところでは小規模ではあるが石垣⑤が認められ虎口を設けている。規模及び郭の位置からみてIII郭が本丸に相当する郭であろうか。

IV郭は93.2mを測り、削平はしっかりとしている。郭内に鍵の手状の土壘⑥が残されている。⑥の土壘は高さ1.5m、長さ21mを測り、城跡内の土壘・石壘では最も規模が大きい。城内ではほかに類例がなく、直角に折れ曲り、郭内での位置を考えると近世後期の所産と思われる。西端部には虎口⑦からつづら折り状に登る通路が入ってくる。また、燈籠坂へ向かう尾根に対して上幅6mの小規模な堀切⑧を入れている。

V郭は標高74.1m、72m×46mの整形の長方形プランである。図版1-1の絵図で遠見番所が建っていたところであろうか。近世後半にかなり手を入れられている可能性がある。東南辺には東側の高所から続く削り残しの石壘⑨が、西南辺には直線の坂虎口⑩が取りつく。

VI郭は標高66.8mで、やはり整形の方形プランである。V郭に従属する郭である。また、V郭から延びる枝尾根を堀状に切断して虎口⑪としている。ただし、この虎口は岩盤の削り方や風化の程度に新しさを感じさせないことから、あるいは戦国期の遺構とも考えられる。

VII郭は54m前後を測り、西端にやや縦長の壠状の高まりが5基並んでいる⑫。高まりの間に大砲を据えたもので砲台の遺構である。高まりは各々規模は異なり、最大で底辺が9m×7mほど、高さは2mほどある。完存といってよい遺存状況である。西端には津浜に降りる虎口⑬が取りついている。砲台跡は間違いなく近世後半の遺構であるが、東半部については腰曲輪の配置や枝尾根の処理の仕方をみると戦国的な様相である。おそらく西半部のみ改造したのではないだろうか。

3. 支尾根部・斜面部

城域の南端である燈籠坂⑭から時計廻りに説明していくこととする。燈籠坂は既に1674年に徳川光圀が著した『甲寅紀行』に登場する峠道で、近世末期までは東京湾沿いを走る房州街道が通っており、切通し状になっている。城内へはしばらく馬背状の細尾根が続き、⑮の地点で小丘状に尾根はふくらむ。しかし、頂部が若干削平されているだけで特に防御拠点とも考えられない。また背後も壠状に落ち込んでいるが⑯、幅が広い割に浅いことから、浅い谷津部を平坦化したものであろう。北へ行くと再び尾根頂部は広がり削平もしっかりと行われている。また、西へ派生する枝尾根に対して土壘⑰を、北西辺に削り残しの石壘⑱を築いている。枝尾根は頂部のみ削平を施しているほかは自然地形である。⑯～⑰のラインの東側斜面には、平面プランがコの字あるいはLの字に壁を垂直に切り落とし平場を造り出した切岸平場遺構⑲が3か所認められる。⑲は2か所の櫓台状の高まりの間を切通し状に通るが、通路の端に礎石と思われる扁平な石が置かれている。砲台段階の木戸が置かれていたところであろうか。さらに北へ行くと堀切⑮の手前で通路は左右に分かれれる。

左手側の斜面に入ると、IV郭直下には外側に土壘を備えた堀底状の通路⑳があり、堅堀㉑にぶつかる。㉑の通路下には裾部近くまで7段の腰曲輪があり、中でも㉑の石垣は全長20mにわたって認められる。石垣は上端部の1mほどの高さは露呈し明確であるが、下半部の2m程は

土砂がかぶり不明確である。しかし、所々に石垣が認められるので全面高さ3mの石垣である可能性もある。いずれにしろ、この石垣は城跡内では最も規模が大きい。石垣は大部分は20cm～30cm大の丸味を帯びた礫で造られ、部分的に長方形の切石も認められる。7段もの腰曲輪を造成しているあたりは字「木出根」と呼ばれている。城内へのルートとしてはかなり重要な箇所であったようだ。

堅堀②からV郭南東辺⑨直下までは腰曲輪が続くが、その下は裾部近くまで腰曲輪は認められない。斜面部に再び腰曲輪が認められるようになるのは、上幅5mの小規模な堀切⑩の下あたりからで、切岸平場遺構群⑪も大規模に造り出されている。さらにV・VI郭の南西側に3～4段の腰曲輪があるが、⑪は1m大の礫を主体に鳥のくちばし状に造り出された登り口がある。大胆な造り方から砲台段階の施設であろう。そうとすれば3～4段の腰曲輪は戦国期の所産とみることができる。⑫の砲台跡の下は広い平場⑬のほかは明瞭な平場を造り出していない。

V～VI～VII郭の東斜面では、VII郭北端の枝尾根先端まで小規模ではあるが削平⑭を施している。また切岸平場遺構⑮も認められるが、谷部が途中から急傾斜になることもあってか遺構は少ないのである。

逆にIV郭から北に派生する支尾根の西側上位斜面には様々に手を加えている。石積みの低い石壘⑯から削り残しの土壘⑰の内側を通って虎口⑦に至る通路下には2段の腰曲輪があり、下端の腰曲輪の内側隅には井戸跡⑯が今も水をたたえている。井戸跡は径1mの円形で水面までの深さは5mほどである。井戸跡の直上には虎口⑦から堀状の通路が開口している。開口する通路は普段は梯子を使用したものと考えられるが、そうなると井戸跡が妨げになる。開口する通路は戦国期、井戸跡は砲台段階の所産ではないだろうか。斜面部にはほかに切岸平場遺構⑮や腰曲輪を造成するために築かれた石壘⑯がある。石壘は高さ1.5m、長さ4mほどで、石壘の構造から戦国期の所産と思われる。⑯は若干頂部を削平した支尾根を切断するように掘り込まれた切通である。底面は土砂に埋まってわかりにくいが階段となっている。掘削時の礫が放置してあることと、城郭構造のセオリーを無視した造りから砲台段階の遺構であろう。切通し⑯を抜けるとIV郭側に向かってしばらく石段⑯が続く。その先は小規模な腰曲輪群が続き、横堀⑯に出る。横堀⑯は上幅8m、IV郭側からだと深さ9mを測り、壁下半は垂直である。IV郭の北側斜面の防御強化とともに北側斜面における重要な通路としても使われている。

III郭の西から北側の斜面にも多種の遺構が残されている。⑯は堀底状に掘り込まれた通路で貯水施設跡⑯に通じる。⑯は長辺20m、短辺3m～8mのやや台形プランの掘り込みで、かなり土砂が堆積し本来の深さは不明であるが、現状では1mほどである。かろうじて水がたまっている。この貯水施設跡に隣接して下の平場⑯に取り付く2か所の通路がある。⑯は削り残しの石壁を断ち割って掘り込み、底面は階段となっている。掘方といい、掘削した礫を放置していることといい、切通し⑯と極めて類似した遺構である。逆に⑯の堀状に開口した通路は、井

戸跡⑨の直上にある開口した通路に類似している。⑩は砲台段階、⑪は戦国期の所産と考えられる。もしそうであるならば、貯水施設跡⑫は⑪と一体のものと考えられることから戦国期の施設であり、砲台段階にも再び使用されたこととなる。なお、⑬の上の腰曲輪端にも低いが石垣⑭が良く残っている。

平場⑮には、長辺0.6m、短辺0.3m、厚さ0.15mの切石を整然と置いた切り石置場跡2か所⑯⑰、縁辺に幅0.7m、高さ0.5mの縁石といえる石墨造構⑯、塹状の高まり、乱雑に積み上げられた礫群などが認められる。さらに斜面は全面石垣造りで、排水用の土管⑯が埋設してある。土管は外径0.6m、器厚5cm、胎土は赤褐色を呈し、内外面とも紫色の鉄軸がかけられている。石垣内に組み込まれた土管の存在から平場⑮は古くても砲台段階の造成となる。おそらくこの平場のことを見ていると思われるが、「富津市史」^[12]では城跡内に大万寺と呼ばれた中世寺院があった伝承を紹介しており、中世までさかのほることはないものの寺院関係の施設があったことも考えられる。あるいは貯水施設跡との関係から砲台段階の居住空間であろうか。

Ⅲ郭から北に派生する支尾根の先端部には、削り残しの石墨⑯と塹状に埋められた虎口⑯が認められる。戦国期の見張り施設であろうか。

I郭の周辺では、北側の海に面した斜面には腰曲輪は認められない。また、白狐川河口に向かう尾根上も所々に小規模な平場があるもの特に防御性は強固とはいえない。

南東斜面においては、II郭からIII郭にかけて腰曲輪や切岸平場造構が残されている。特に三柱神社脇に延びる支尾根上には、切岸平場造構⑯⑰や小規模な平場、腰曲輪が多数造られており、この尾根上の通路に対してはかなり防御に力を入れている。

4. 据 部

据部に残された造構は砲台跡と戦国期の居館推定地である。砲台跡はまずⅣ郭西下の海際のところ⑯である。ここは砲台段階と考えられる石垣しか残されていないが、図版1-1の絵図に描かれた砲台に該当するであろう。もう1か所は白狐川河口の十二天神社の脇にあり、砲台跡⑯と同様に5か所の高まり⑯が並列している。造存状況はほぼ完璧である。またそこから西側へ海岸に沿って腰曲輪状の平場⑯が延びている。

次に戦国期の造海城主の居館を中心とした居住域は、三柱神社・延命寺あたりの据部(A、B)と字「木出根」(C)あたりに想定されよう。百首湊は白狐川河口か津浜のどちらにあったのか、また山頂から斜面にかけての城郭造構の分布から判断しなければならないが、主なる湊はやはり白狐川河口であり、三柱神社・延命寺の寺社の存在からみて、居館は白狐川沿いの据部にあったものと考えられる。ただ、字「木出根」地区も濃密な城郭造構の分布からみてかなり重要視されていた所で、津浜も補助的な湊として使われていた可能性は十分あるであろう。

第5章 まとめ

1. 測量調査からみた造海城跡

今回の測量調査によって造海城跡は戦国期と近世後半の砲台段階の遺構がそれぞれ明瞭に残されていることが判明した。

戦国期の遺構はV郭・VI郭の改変と平場⑩の造成によって破壊されてはいるものの、ほかはかなり遺存状況が良好であった。城域は全丘陵に及び、主郭部は7か所の郭（I～IV）から構成されていた。ただし、I郭は捨曲輪的な存在といえよう。また、郭間にはI郭とII郭に唯一堀切③を入れているだけで、ほかの郭間は馬背状の尾根で結ばれており、中心郭がつかみにくく郭配置であった。また、郭から海側に派生する支尾根は先端まで手を入れており、海上に対する並々ならぬ配慮が窺える。防衛線の主体はどちらかといえば斜面部にあるようで、I郭を除いた各郭の斜面には大小さまざまの腰曲輪や切岸平場を構築して防御力を高めている。特に内陸側の「木出根」地区と三柱神社側は念入りに手を入れている。

砲台段階の遺構としては、砲台跡3か所（⑪、⑫、⑬）、郭2か所（V、VI）、井戸跡2か所（②、⑭）、切通し遺構2か所（⑮、⑯）、石垣積みの平場1か所（⑰）が主なものである。中でも、⑪と⑬の砲台跡が充実していたことは特筆できよう。また、寺院施設であった可能性もある平場⑩は、その性格を解明することが砲台施設を全体で考える上で重要な場所となるであろう。

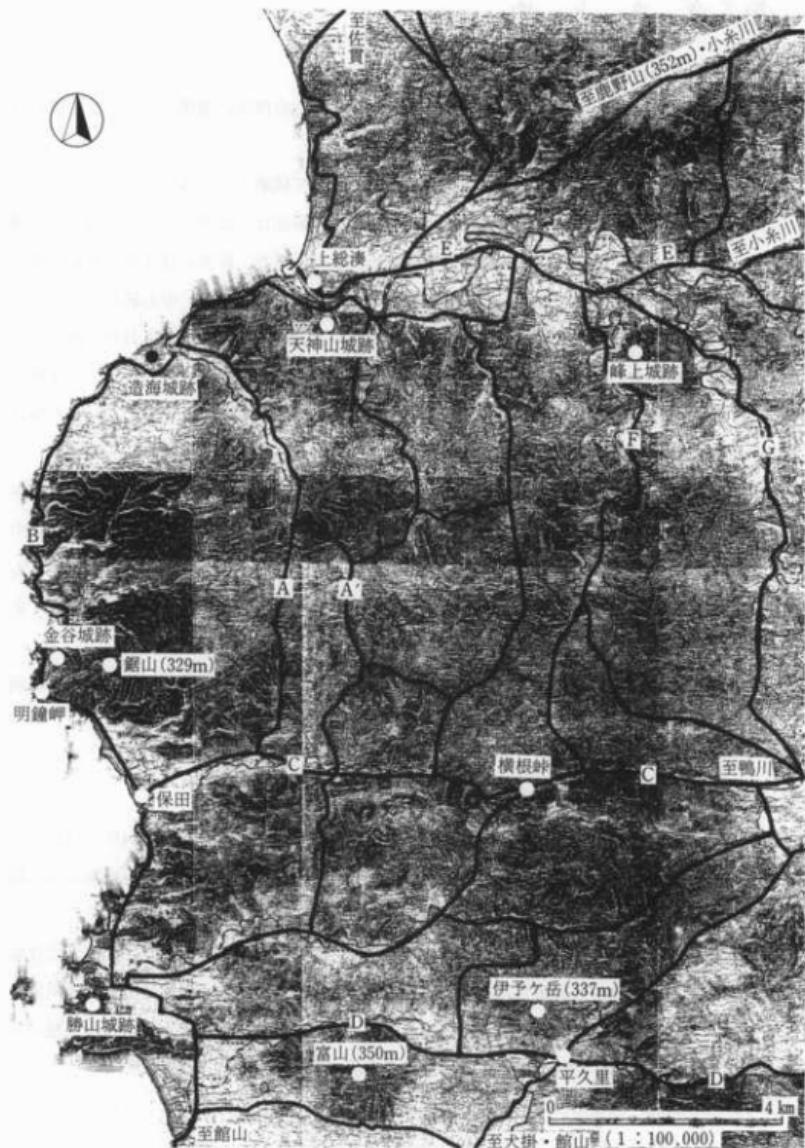
いざれにしろ、戦国期の城郭遺構と近世後半の砲台関連遺構が同じ場所に残されている事例は千葉県内では唯一であり、おそらく全国的にみてもまれな事例であろう。

2. 史料・記録などからみた造海城跡

造海の地は建武4年（1339）の史料Aによって史料上初めて確認され、応永24年（1417）の史料Bによって鎌倉府の御料所であったことが確認できる。鎌倉府は鎌倉と西上総南部の結節点として造海郷を直轄地（湊）としていたことが窺える。

造海城の初出史料は、天文2年（1533）の史料Cで、この時は里見氏の内乱に関連して登場する。しかし、史料Dからも明らかなように、造海城は真里谷武田氏の属城であり、武田氏にとって峰上城とともに西上総南半における拠点城郭であった。そして、峰上城が内陸交通の要衝を抑える性格の城郭とすれば、造海城は対岸の武藏・相模を視野に入れた城郭であったといえよう。この城郭の性格は次の里見氏の属城となつても基本的には変わることはなかったのである。基本的な性格に付け加えられたものがあるとすれば、史料Fで明らかのように東京湾を行き交う廻船に対して里見氏領内では唯一海港機能を持った湊を保護・管理する機能であろう。

また、百首湊に伊勢大湊を中心とする西国からの外洋船が直接寄港した可能性も考えられる。



第4図 近代初頭の主要道図
(明治14～16年作製の参謀本部陸軍部測量局迅速図使用)

この点は証明する史料は全く確認されていないが、白狐川流域沿いに残されている「品川」や「伊勢船」の小字地名は示唆的である。これらの地名は白狐川の中流や山中に残されていることから、直接港の施設が置かれた場所を示すものではないが、寄港する船に関係した給免田畠や、船上に供給する薪炭の指定生産地であった可能性がある。

次に第4図を参照しながら造海城周辺の陸路について触れてみたい。この図は明治14年から16年にかけて陸軍によって作製された地図から、記載された主要な道路を図示したものである。これらの道路はあくまでも近代初頭のもので、古くさかのぼっても近世後半の状況を示しているに過ぎないであろう。しかし、陸上の交通形態が中世と近世ではあまり大きな変化がないとすれば、ここに図示した道路から中世の道路を推定復元することも無意味なこととはいえないであろう。

上記のような前提に立って造海城跡周辺の道をみると、まるであみだくじのように南北方向と東西方向の道に基本的に分けられる。南北方向は上総と安房を結ぶ道であり、東西方向は内房（東京湾岸）と外房（太平洋岸）の鴨川を結ぶ道である。造海城跡に關係する道は白狐川沿いに南下する道A、A'で、保田と鴨川を最短で結ぶ東西道Cにつながる。また、海岸沿いに走る道Bがある。しかし、この道Bは先述した『甲寅紀行』で明らかに1674年段階で造海城跡から明鏡岬までの間が、荷を付けた馬が通れないほどの難所であったように、中世の段階では道A、A'の方が道Bよりも主要な道であった可能性が高い。道A、A'を使えば道Cの横根岬を通って外房へ、平久里を経由して里見氏の主要城郭であった滝田城、岡本城及びその先の館山まで通じていたのである。

このように、造海城は唯一の海關機能をもつ港と主要道の結節点であり、海上交通と陸上交通が交わる交通の要衝に築かれた城郭といえよう。ただ、白狐川の河川交通については、白狐川の流域が短く、川幅も狭く、さらに川床も浅いことから、河川交通には適さず重要視することはできない。

同じ視点で峰上城をみると、道Eを通じて湊川河口や小糸川流域へ、道Fを使って館山や外房に行くことができる。また城下を流れる湊川は水量も豊かで河川交通が可能な川である。峰上城は海上交通との直接的な結節点はないものの、陸上交通と河川交通の交わる交通の要衝に位置していた。交通の要衝という点では造海城と同様である。

逆に金谷城は造海城と比べ陸上交通との結節が弱いといえる。この点が、金谷城が造海城の属城と位置付けられ、海關は造海城に置かれた要因であろう。

なお、勝山城下に認められる鍵の手道は近世に勝山藩が置かれた名残りである。

3. 海域の定義

海域は従来から海賊城と言われてきたもので、現在でも後者の方が通りがよいのが実情であ

ろう。海域は海に接し港を有することが最低限の条件であるが、近年までの海城に対する定義と最近の海域の定義には大きな隔たりが認められるようになった。

海域の定義が大きく変化した原因は、最近の中世史研究で太平洋岸の東国と西国間の水運や東京湾内の流通について急速に関心が高まったことを背景に、滝川恒昭氏⁽¹⁸⁾が水運・流通と海域を結びつけたことによる。

滝川氏によれば、従来の海城（海賊城）は、①性格は海上勢力の拠点、②機能は海に対する見張所・通信施設であるとともに海關である、と定義付けられているとした上で、氏は東京湾沿岸の海域を個々に検討した結果、海域はすべて港と一体のものであり、しかも海上交通・陸上交通・河川交通の結節点を抑えるための軍事施設と新たに定義した。

従来の海域の定義は、海賊（水軍）のイメージに束縛された軍事的な視点で海上交通だけに目を向けた感があり、極めて中世の世界に完結するものであった。しかし、滝川氏の定義は経済的な視点を出発点に交通・流通の要衝を抑えることが海域の最も重要な機能であるとし、水陸の交通・流通史研究へ展開できる指針を明らかにし、また近世の世界に繋がる方向性も見い出せるものである。

本論では、海域の定義及び分類基準については基本的に滝川氏のものに準拠した。ただ、海域の分類については、ここでは①城の主郭部直下が内湾か河口に面している、②城の直下に港が確実にあったことを想定できる地形、の2点の特色が見い出せる城を海域とした。このため、海に面するが港機能が認めにくい城や外郭部が港に接している城については、海域としては認定せず、滝川氏の分類と比べ海域をより限定した範囲でみている。

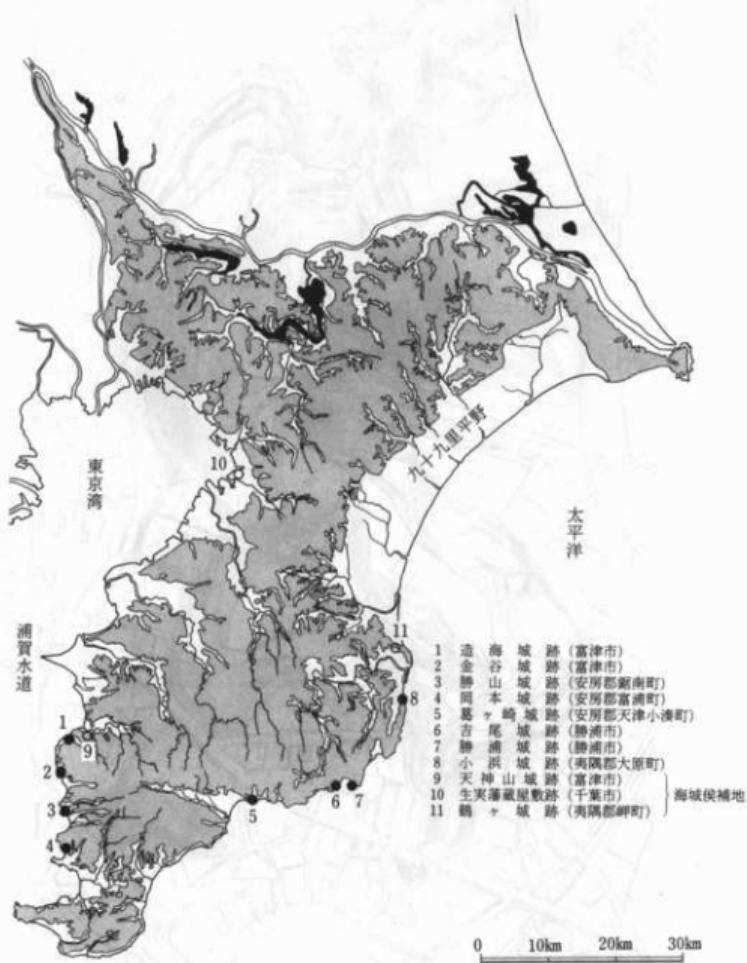
4. 房総の海域

海域は海に面した都道府県であれば、基本的には地形的な制約がない限りどこでも認められるであろう。ここでは、千葉県内の海域についてみてみたい。

千葉県内に所在する海域は、東京湾岸の内房地区では北から造海域跡、金谷城跡（富津市）、勝山城跡（安房郡鋸南町）、岡本城跡（安房郡富浦町）の4か所、及び根古屋地名の存在と発掘調査によって堀跡が検出されたといわれる（未報告）が、遺構・城域とも不明確な天神山城跡（富津市湊川河口）と後述する生実藩藏屋敷跡（千葉市）の海域推定地2か所が確認されている。

太平洋岸の外房地区では、北から小浜城跡（夷隅郡大原町）、勝浦城跡（勝浦市）、吉尾城跡（勝浦市）、葛ヶ崎城跡（安房郡天津小湊町）の4か所と夷隅川河口部に位置したことも考えられる鶴ヶ城跡（夷隅郡岬町）の海域推定地1か所が確認されている。

推定地も含めると計11か所の海域が確認されたわけであるが、11か所の分布をみると生実藩藏屋敷跡を除いて上総南半から安房北半の範囲に限定されることが明白である。この特色的背



第5図 房総の海城分布図

第6図 岡本城跡測量図 (注17文献より)



景には、まず地形条件からくる制約がある。内房地区では富津岬以北では丘陵が直接海岸に接する地形はなく、台地の前面が遠浅に広がる浜地形と河川が形成した沖積地によって占められ、海岸に接した丘陵状地形は認められない。また、外房地区でも同様で、夷隅郡以北から銚子市あたりまでは九十九里浜と呼ばれる長大な砂堤地帯によって占められている。

ただ、ここで問題となるのは、丘陵に立地する城は現在まで遺構が残りやすいが、低地に立地する城は後世の改変を受けやすく遺構が残りにくいことが指摘できる。このため、低地にも海城があった可能性は充分ある。例えば生実藩蔵屋敷跡の発掘で戦国期の遺構・遺物が検出されたといわれるが、そうとすれば浜野川河口の砂堤上に海城があった可能性がでてくる。

二つ目の特色としては、11か所のうちに小浜城跡、鶴ヶ城跡、生実藩蔵屋敷跡を除く8か所の海城が里見・正木氏に関係していることである。里見氏と正木氏の関係は時によって敵対関係になることもあり複雑ではあるが、後北条氏滅亡の直前の段階は同盟関係にあり、豊臣方からは里見氏の重臣として捉えられていた。いずれにしろ、里見氏と正木氏は経済的にも軍事的にも海に依存する度合いが高かった権力構造であったことは間違いない。

ここでの問題点としては、地形的には充分な条件を有しているにもかかわらず、里見・正木氏の本拠地である安房南半部に海城が認められないことである。この点は、里見氏が天文の内乱を経て1540年前後から拠点（本城）を上総南半に移したことが関係しているかもしれない。拠点が移れば交通体系、流通体系も大きく変わることから、これらの体系の結節点である海城の位置も当然影響を受けるであろう。また、安房南半に本拠を置いた15世紀後半から16世紀中葉までの段階にも里見氏は海城を有していたであろうが、城郭構造が単純であったり、伝承や記録に残らなかったことで、現在城跡として把握されていない海城がいくつかある可能性は残されている。

次に房総の海城の分布からみた海上交通の問題について考えてみたい。先の海城の定義でみたように、海城は湊と一体のものであり、それまでは水軍（海賊）の根拠地＝海城（海賊城）というように軍事的な視点での捉え方が強かったが、湊を維持・管理・保護するために海城が必要であったという経済的な視点を導入することで、海城は単に軍事史・政治史の資料であったものが、戦国時代の社会経済史を研究する資料に転化したわけである。

湊が海城によって恒常に維持・管理・保護されるということは、領主側からみれば湊に蓄積される経済権益を得るための政策である。また、湊を利用する立場の者からみれば、多少なりとも海關錢を徴集されようとも、恒常に維持・管理され、しかも安全な湊であれば利用しようと考えるであろう。

このような観点で房総の海城をみると、内房地区にある海城は東京湾を舞台とした内湾の海上交通の拠点としてまず位置付けられる。房総と相模・武藏との関係である。さらに、最近明らかにされたように伊勢大湊と武藏品川湊には海上交易が想像以上に発達していたが⁽¹⁹⁾、房総

側の港にも西国から直接船が入港していた可能性も考えいかなければならない。造海城跡周辺に「品川」や「伊勢船」の小字名が残されているのは注目すべきであろう。

外房地区の海城のある港は、もちろん東京湾をはじめ西国との関係を抜きにしては語れないが、もう一点北日本の太平洋岸地域との関係も注意する必要がある。銚子沖が船の難所であったことから、近世においても房総沖を航行する船は少なかったとする前提で、中世段階では全くといってよいほど海上交通はなかったと考えられている。しかし、地形的に良港である場所に大規模で恒常的に維持される海城が存在することは、やはり内房地区と同様に港に集積される経済権益があるからこそ築かれるのであって、太平洋岸の西日本と北日本を結ぶ海上交通の隆盛を前提にしなければ理解できないであろう。

5. 結 語

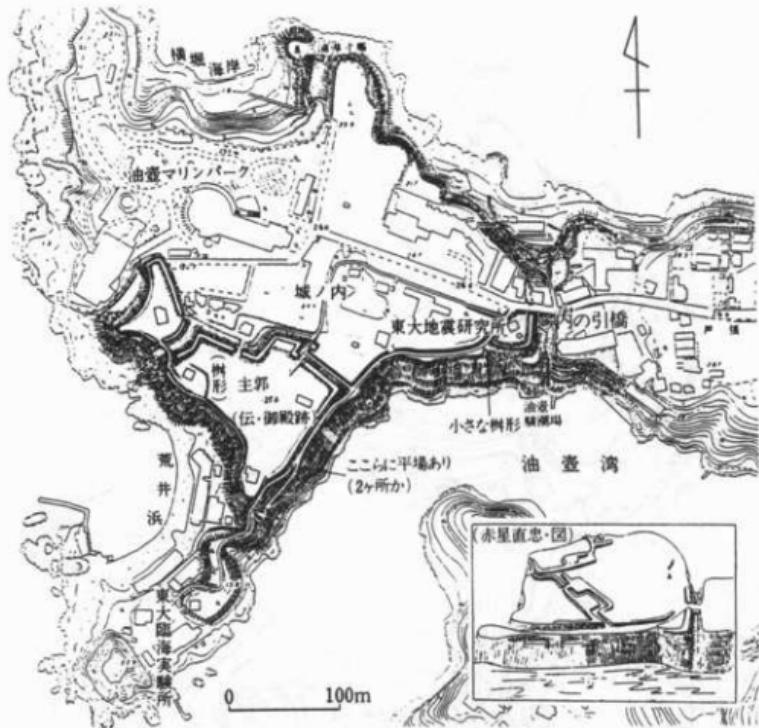
筆者は本論でも若干触れた岡本城跡（第6図）の発掘・測量調査を9年前に担当した。現在では確実に海域として認定しているが、9年前には海上交通との結びつきには一言も触れていない。当時の調査は遺構確認のための発掘調査を伴っていたため、報告書の主眼は検出された遺構・遺物に向けられたこともあるが、海城に対する視点を持つことができなかつたのが要因であった。

しかし、わずかここ数年の間に東京湾をめぐる水上交通研究の急速な深化、そして滝川恒昭氏による新たな海城の位置付けなどの業績がなければ、おそらく本論は単に造海城跡を海賊城の一つとして紹介ただけであろう。まさに、最近の研究の進展によって造海城跡はさらに歴史資料上の評価が高まつたといえよう。

ただ、本論では追求できなかった課題も多く残されているのも事実である。まず、今回は房総半島の海城に限定して触れたが、海城は対岸の三浦半島に浦賀城跡（横須賀市）、三崎城跡（三浦市）、新井城跡（三浦市・第7図）など、伊豆半島にも下田城跡（静岡県下田市・第8図）を初め多数所在し、基本的にはよほど地理的な条件が悪いところを除けば、海に面する都道府県であれば必ず海城は存在するのである。海城という共通した歴史資料を使えば、戦国期の水上交通、流通といった経済史研究に大きく寄与できるであろう。

逆に海城を海上交通の拠点だけで考えることは資料価値を半減させるものである。滝川氏も本論も強調したように、海城は海上交通と陸上交通・河川交通の結節点である港を管理・保護する施設であって、内陸交通の問題を抜きに考えることはできない。海城だけでなく、河川や湖沼に面して立地する川城や湖沼城も視野に入れ、水城あるいは水城⁽²⁰⁾の概念の中で位置付けていく必要がある。

最後に歴史的環境と城跡の構造の項で触れただけであるが、近世後期の東京（江戸）湾の海防関係についてである。造海城跡に完璧な形で残された砲台跡をはじめ、房総沿岸には富津岬



第7図 新井城跡概念図
(田中祥彦氏作図『図説中世城郭事典(一)』より)

や大房岬などにも良好な状況で砲台跡や見張番所跡が残されている。これら広義の城郭遺構については全くといってよいほど研究がなされていないのが現状である⁽²¹⁾。今後の開発の進展を考えると早急な調査研究が望まれる。

以上、造海域跡が戦国期と近世後期の遺構を予想以上に良好な状態で留めていることが明らかになり、また、これまで指摘してきたように海域の視点でみると戦国期の経済史研究にとってかけがえのない歴史資料であることが明らかになった。

註

- 1 『千葉県史料中世篇縣外文書』466号 1966
- 2 『千葉県史料中世篇縣外文書』267号 1966
- 3 造海域から百首城に城名が変わったことについては有名な伝承がある。それによれば、造海域は真



第8図 下田城跡概念図
(青藤慎一氏作図「区説中世城郭事典(二)」より)

里谷武田氏の城であったが、里見成義に攻められた時、武田方は里見方が百首の和歌を詠んだならば開城するという条件を出したところ、忽ち百首詠まれたため開城することになったことから、それ以後は百首城と呼ばれるようになったという。この伝承は既に延宝2年(1674)に著された「甲寅日記」という紀行文に紹介されている。

- 4 「神道大系神社二十鶴岡」神道大系刊行会 1975
- 5 「神道大系神社二十鶴岡」神道大系刊行会 1975
- 6 峰上城跡は富津市環に所在し、造海城跡の東方6kmの内陸部に位置する。なお、当城跡については91年度に県教育委員会によって測量調査が実施されている。
千葉県教育委員会『千葉県中近世城跡研究調査報告書—峰上城跡測量調査報告—』第12集 1992
- 7 新地之城は別の史料にまりやつしん地とあり、現在真里谷城跡の北西4kmに位置する天神台城跡(木更津市)に比定されている。
小高春雄「真里谷『新地』の城について」『千葉城郭研究』第3号 千葉城郭研究会 1994
- 8 「千葉縣史料中世篇諸家文書」247号 1962
- 9 「千葉縣史料中世篇縣外文書」268号 1966
- 10 「神奈川県史資料編3古代・中世(3下)」9770号 1979
- 11 「神奈川県史資料編3古代・中世(3下)」9771号 1979
- 12 江戸湾東岸の海防に関する記述は主に『富津市史』に掲った。
八田英夫「海防」「富津市史・通史」第八章 1982
- 13 紀行文に関しても『富津市史』に掲った。
中嶋清一「文学」「富津市史・通史」第九章 1982
- 14 明鐘岬の山頂から山腹にかけて註10の史料で触れた金谷城跡(富津市金谷)が所在する。
金谷城も造海城と同様に正木淡路守の城郭である。
- 15 陸奥白河藩松平家は文化7年(1810)に房総沿岸の海防を命じられ、造海城跡に砲台と近くに陣屋(竹ヶ岡陣屋)を築いたが、文政6年(1823)に伊勢桑名に転封となった。
- 16 「金谷城跡」御用津都市文化財センター 1988
- 17 「千葉県中近世城跡研究調査報告書」第6集 千葉県教育委員会 1986
- 18 滝川恒昭「戦国期江戸湾岸における「海城」の存在形態」「千葉城郭研究」第3号 千葉城郭研究会 1994
- 19 細賀友子「「武藏国品川湊船帳」をめぐって—中世関東における隔地間取引きの一侧面—」「史辨」30号 1989
- 20 湊城については既に滝川氏が註18の文献で提唱しているが、滝川氏は海域の呼称が海賊城の呼称を完全には払拭していないと考えられたのか、湊城については遠慮がちに提唱されている。しかし、海域、川城、湖沼城に共通する要素は水と湊であることから、湊城の呼称は本質を突いた卓見である。
- 21 筆者の知る限り、関西の城郭談話会会員の角田誠氏(兵庫県伊丹市在住)が個人的に調査を継続さ

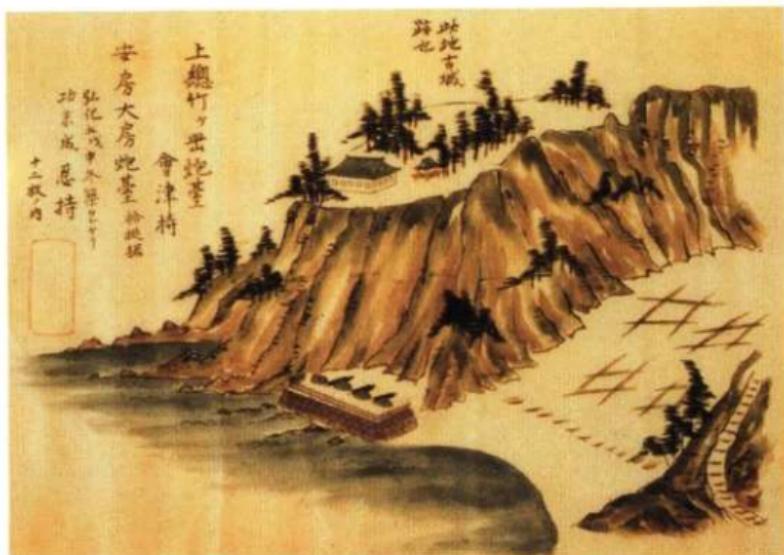
れでいるだけである。

22 「富津市史」

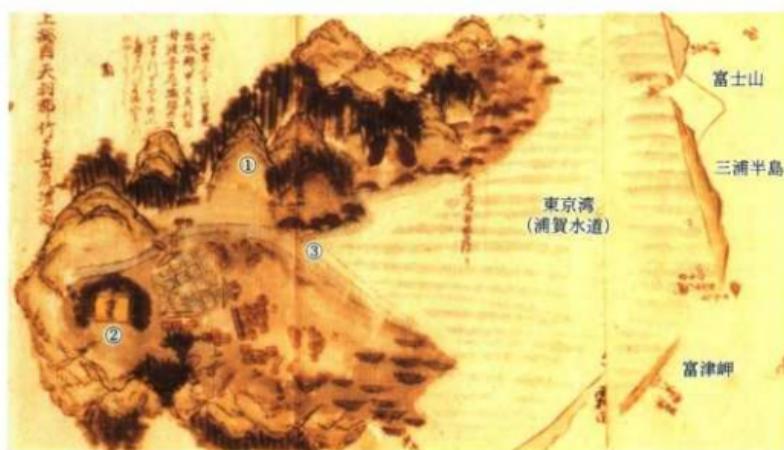
参考文献

- 桜井成廣「海賊城としての百首」『城郭』31号 1964
千野原靖方「房総里見水軍の研究」嵩書房 1981
西ヶ谷恭弘「戦国の城」学習研究社 1991

写 真 図 版

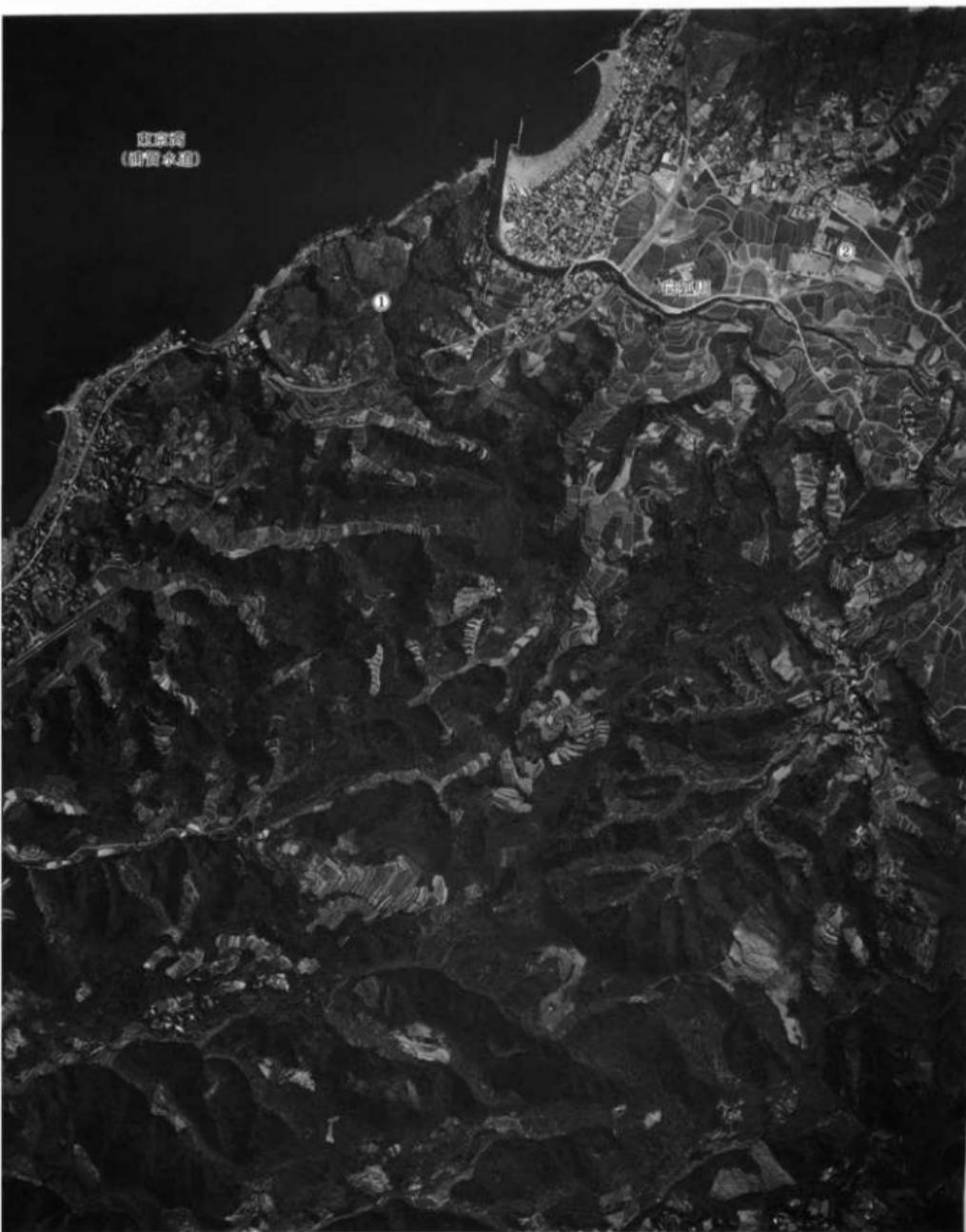


1. 上総竹ヶ岳砲臺絵図（船橋市西図書館蔵）＊造海域跡を西からみている



2. 上総国天羽郡竹ヶ岳荒増之絵図（船橋市西図書館蔵）

①造海域跡 ②竹ヶ岡陣屋 ③白孤川河口



造海域跡周辺空中写真（1967年撮影）京葉測量㈱提供

①造海域跡 ②竹ヶ岡陣屋跡

- ① 鹿島御殿
- ② 芦原御殿
- ③ 東「高麗」
- ④ 東「伊豆」
- ⑤ 東「入道」
- ⑥ 東「水戸」

東京湾
(都営水道)



造海城跡空中写真（1946年米軍撮影） 諸日本地図センター提供



1. 造海城跡遠景俯瞰（北東から）



2. 造海城跡近景俯瞰（北東から）



1. 城跡裾部と対岸の三浦半島（北東から）



2. 白糸川沿いの平野部（北西から）



1. 城跡北東端の白狐川河口部（東から）



2. 城跡北側の裾部（東から）



1. 砲台跡⑫遠景（南から）



2. 砲台跡⑫近景（南東から）



1. 石塁遺構⑩（南から）



2. 土塁と通路⑩（南から）



1. 井戸跡⑩（南西から）



2. 石垣遺構⑩（北から）



1. 切岸平場遺構⑩（南から）



2. 切通し遺構⑪（西から）



1. 横堀⑦ (西から)



2. 横堀⑦ (東から)



1. 貯水施設跡⑩（南東から）



2. 石垣遺構⑩（北西から）



1. 切通し遺構① (西から)



2. 石塀遺構④ (南から)



1. 切石置場跡④ (北西から)



2. 切石置場跡⑤ (南から)



1. 石垣と土管⑯（北西から）



2. 石垣と土管⑯（南西から）

報告書抄録

ふりがな	ちばけんちゅうきんせいじょうせきけんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	千葉県中近世城跡研究調査報告書
副書名	造海域跡測量調査報告書
卷次	第15集
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第269集
編著者名	柴田龍司
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター TEL 043-422-8811
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地の2
発行年	西暦 1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
造海域跡	富津市竹間字 城山9735他	12226	006	35度 12分 8秒	139度 50分 30秒	1994.11.01 ～1994.12.28	450.000m ² (測量調査 のみ)	国庫補助事 業による学 術調査

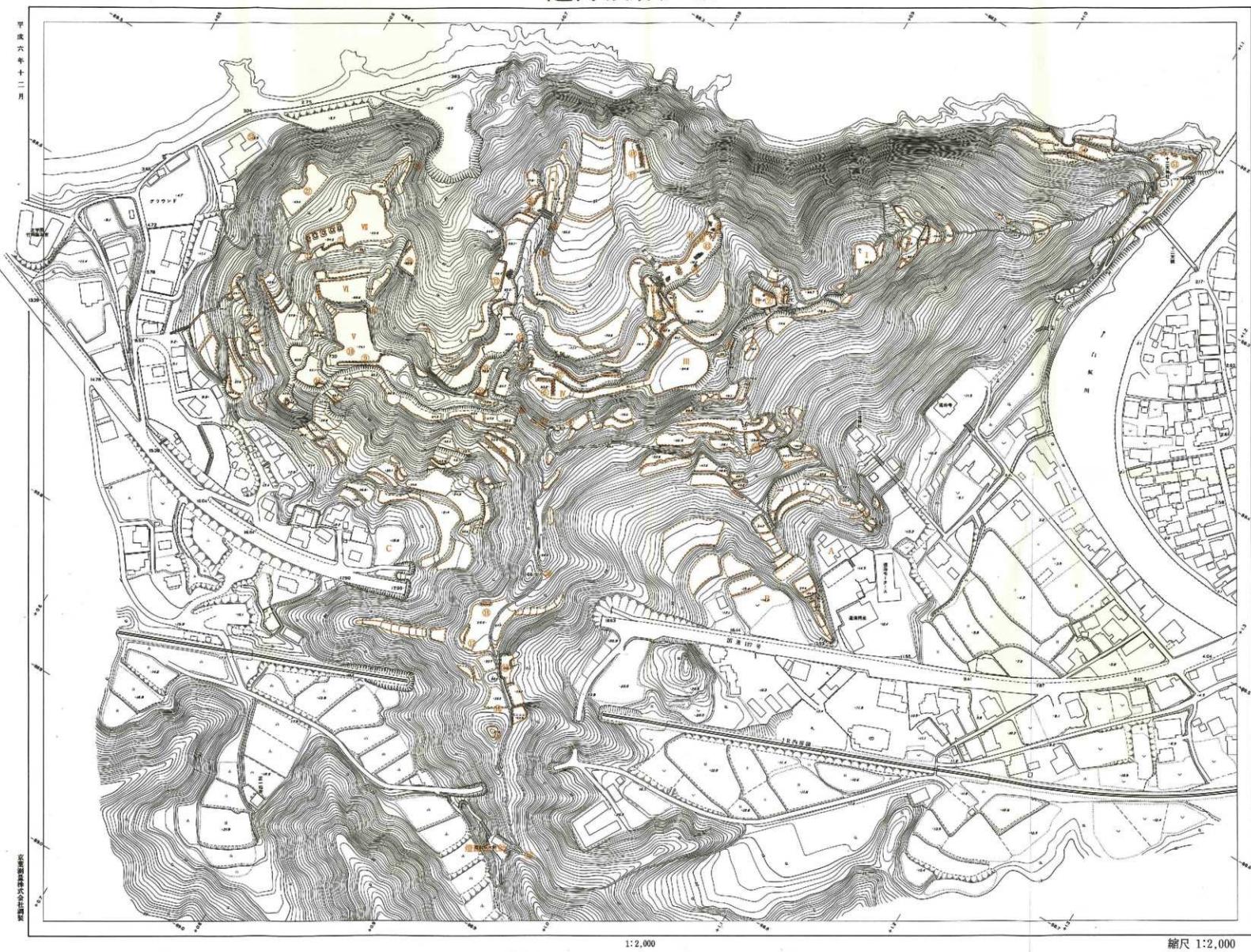
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
造海域跡	城跡	中世、近世	郭、土塁、石塁、堀切、 虎口、腰曲輪、石垣、 井戸、砲台、貯水施設	なし	駿国大名里見氏の湊を 抑えるための海城として 著名。丘陵全域を城域に し、石垣や貯水施設など 里見氏系城郭の特色が見 られる。 また、江戸後期に江戸 溝防備のために築かれた 砲台も良好に残されてい る。

造海城跡概念図

平成六年十二月



財團法人千葉県文化財センター



1:2,000

縮尺 1:2,000

造海城跡概念図



千葉県文化財センター調査報告第269集
千葉県中近世城跡研究調査報告書 第15集
—造海城跡測量調査報告書—

平成7年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2
印 刷 株式会社 集 賛 舎
千葉市緑区古市場町474-265

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。